

# 許 真 君 伝 考

## ——浄明道研究序説——

秋 月 観 暎

### はじめに

中国宗教史を儒仏道三教の交渉史として総合的に捉えようとする研究が試みられてから、既に久しい年月を経ており、長期に亘る対立・交流を繰返しながら、近世に入つていわゆる三教融和の情勢を生み出してゆく三教交渉の大勢は、概ね明らかになつたといえる。併し細部に眼を転ずるならば、漢末以来の仏教と道教、仏教と儒教の關係に豊かな研究の照明が向けられているのに比較して、儒教と道教の交渉關係には未だ闇に覆われた面が少なくなく、三教交渉史の体系的把握を阻げる盲点となつているのが現状である。小論の狙である浄明道の形成は道儒兩教の間の本質的な思想的交流を成就する最も顕著な動勢と見ることが出来るように、儒教道德、特に忠孝の実践を標榜する浄明道の出現が実質的な三教融和の關係を達成し、近世中国宗教史の新しい局面の展開を導き出すうえに、極めて重要な役割を担つていると見られる点は注目の必要があろう。ところで、この浄明道について、第四十二代天師である明初の張宇初が道門十規の道教源派始自（第三・四紙）の条に、

元始靈宝乃混沌之初、玄元始三氣化生、其本則一、後之闡化則有祖天師、許真君、葛仙翁、茅真君、諸仙之派、世降之久不究其源、各尊派系、若祖師之曰正一、許君之曰浄明、仙公之曰靈宝、茅君之曰上清、此皆設教之異名、其本皆從太上而授、凡符籙經教齋品道法之伝、雖伝世之久、各尊所聞増減去取、或有不同而源委則一、

と述べており、浄明道が正一、靈宝、上清の主要教派と並ぶ重要な存在であつたことを窺うるが、今日これに関する專論的な論考は皆無といつてよく、未開拓な道教学の中にあつても最も不毛な分野として残されている。小論は今後積み重ねてゆくべき浄明道研究の最初の作業として、この派の教祖である許真君（許遜）の記伝を取りあげ、その伝承の演變を通して浄明道成立の経緯を窺見せんとするものであるが、たと紙数の制約もあり、自から許真君伝関係資料の整理に重点がおかれることにならうし、浄明道に対する筆者の全体的な把握が不十分な為に起る不備の点も定めし少くないことゝ思われるが、これらはいずれ今後の発表を通じて補つてゆく所存であり、大方の御教示を切望する次第である。

本論に入るに先立つて行論の便宜上、予めこゝで許真君伝関係資料を道藏の収録順序に従つて紹介し、併せてその大まかな成立年代を見定めておきたい。まず最初に纏つた体裁をもつ專伝を掲げるならば、

- (1) 旌陽許真君伝（修真十書玉隆集 卷三十二所収）洞真部方法類 一二七冊。
- (2) 許太史（歷世真仙体道通鑑 卷二十六所収）洞真部記伝類 一四三冊。
- (3) 許太史図伝（二卷）洞真部靈図類 一九七冊。
- (4) 許真君仙伝 洞玄部譜錄類 二〇〇冊。
- (5) 西山許真君八十五化録（三卷）洞玄部譜錄類 二〇〇冊。
- (6) 孝道吳許二真君伝 洞玄部譜錄類 二〇一冊。
- (7) 許遜真人伝（雲笈七籤 卷一〇六所収）太平部 六九九冊。
- (8) 浄明道師旌陽許真君伝（浄明忠孝全書 卷一所収）太平部 七五七冊。
- (9) 許真君（消搖墟經 卷二所収）統道藏 一〇八一冊。
- (10) 許真君（搜神記 卷二所収）統道藏 一一〇五冊。

その他、道藏中の断片的な記伝資料としては

- (11) 清微仙譜（第四紙）洞真部譜錄類 七五冊。
- (12) 仙苑編珠（卷下 第十二紙）洞玄部記伝類 三三〇冊。

(13) 三洞羣仙錄 (卷四 第三・四紙。卷一四 第九・一〇紙。卷一六 第五紙) 正乙部 九九二—九九五冊。  
なお、藏外資料として特に重要なものに

(14) 許真君 (太平広記 卷十四所収)

がある。このほか明代以降において興味本位に脚色された小説本、及び関係資料が少なからず存しているが、浄明道の成立を窺うべき基本的な資料となしうるものは上掲十四点と見てよいであろう。

ところで、これら諸資料に記載される許真君の尊号の記載は各資料の成立年代の判定に大まかな、しかし比較的確実な手懸を提供する。即ち浄明道師旌陽許真君伝(卷一)は許真君に対する尊号の晋封について

政和二年、徽宗降玉冊、上尊号曰、神功妙濟真君、(中略)元成宗皇帝加封号曰、至道玄応神功妙濟真君、

と記しており、神功妙濟は宋の政和二年(一一一二)、至道玄応の加封は元の成宗の在位年代である一二九五—一三〇七年の間に Rowe されていることが知られるが、この再度に亘つて奉られている尊号の有無によつて上掲資料の予想される成立年代を三つのグループに分類することが出来る。その第一は徽宗、成宗の奉つている二つの尊号を全く記載しないものであり、一一二一年以前の成立が予想される(1)(6)(7)(13)(14)の資料グループ。第二は神功妙濟の尊号のみを記載するもので一三〇〇年ころまでに成立したと見られる(2)(5)のグループ。残余の(3)(4)(8)(9)(10)(11)が神功妙濟至道玄応の尊号を記載し、ほと一三〇〇年以降の成立と推定される第三のグループである。以下、この大まかな見当を念頭において、主要な記伝資料即ち(1)(10)及び(14)について、成立年代並びに各記伝相互の繋絡・継授の關係を検討しながら許遜伝承の演變の跡を考察して見よう。

### 許真君伝承の演變と記伝の系譜

まず最初に許遜伝の概略を記伝資料中、最も簡潔な体裁をもつ許遜真人伝によつて紹介しよう。本伝を収録する雲笈七籤は宋の張君房の集進にかゝるもので、自序によれば大中祥符九年(一一〇一)に着手して道藏七部の精要を集め、天禧三年(一一〇一)に完成したものであり、本伝の成立がこれ以前に溯るものであることは云うまでもない。

許遜字敬之、南昌人也、少以射獵為業、一旦入山射鹿、鹿胎從髀箭瘡中出墮地、鹿母舐其子、未竟而死、遜愴然感悟、折髀而帰、聞予

章有孝道之士吳猛、學道能通靈達聖、歎我緣薄未得識之、於是旦夕遙禮拜、猛久而弥勤、已鑒其心、猛升仙去時、語其子曰、吾去後東南方有人、姓許名遜、応来吊汝、汝当重看之、可以真符授也、至時遜果来吊、其子以父命將真符伝遜、奉修真感有愈於猛、

この伝には許真君伝承にまつわる神異靈驗譚は全く姿を現わさないが、本伝を構成する(一)許遜の出生と発心の動機、(二)孝道の士吳猛に対する傾慕、(三)吳猛の昇仙後における間接的な神符の伝授、(四)師吳猛を凌駕する許遜の真感の高揚の記述中、(五)許真君の記伝において殆ど例外なく何等かの重要な役割を担つて登場しており、両者の関係の変遷が許真君伝承発展の要ともなつてゐるからである。この吳猛とは晋書(卷九五) 芸術伝において

吳猛予章人也、少有孝行、夏日常手不驅蚊、懼其去己而噬親也、年四十、邑人丁義始授其神方、因還予章、江波甚急、猛不假舟楫、以白羽扇画水而渡、觀者異之、庾亮為江州刺史、嘗遇疾聞猛神異、乃迎之問、已疾何如、猛辭以箚尽、請具棺服、旬日而死、形狀如生、未及大斂、遂失其尸、識者以為亮不祥之徵、亮疾果不起、

と記される如く、孝道並びに神異に傑出した人物であり、のちに所謂二十四孝の一人に挙げられ、家貧にして蚊帳なく、親を蚊の苦しみより救わんとして自ら裸で床につき、蚊を追うことをしなかつた、代表的な孝子とされる人物である。この吳猛と許真の関係は上掲の如く、許遜が吳猛の存在を知りながら面識の機会がないまゝ僅に吳猛の遺命に従う遺子を介して真符を授けられるに止まり、両者の間には未だ直接的な師弟関係が成立していない。一方、同じく雲笈七籤(卷一〇六)の吳猛真人伝には晋書同様、許遜との交渉については何等の記載も見当たらないが、後に許真君の靈異として発展せしめられてゆく蛟蛇征伐その他の事跡が吳猛自身の事跡として掲げられている。たゞしその記載は次の如く

(吳猛)後得道、海上徼路有大蛇、時或斷道以氣吸吞行人、行旅為絕、猛与弟子往除蛇害、蛇乃入藏深穴、猛勸南昌社公追蛇、蛇頭高数丈、猛踏蛇尾、沿尾而以足按頭、弟子斫殺之、

吳猛単独の行動としてではなく、弟子の協力によつたことを記しているが、この点こそ後の許遜伝承が逆に吳猛の靈異を包摂しつゝ発展せしめられてゆく根拠となつたものであり、予め注意しておくべき事柄である。

次に太平広記所収の諸伝を検討するに、太平広記は宋の李昉を中心として太平興国三年(九七八) 八月十三日に上進さ

れ、同六年（九八一）に至つて雕印されたものであるが、本書の中に「許真君」（巻十四）のみならず「吳真君」（巻十四）、更に許遜の悟道に重要な役割を果たす「蘭公」（巻十五）の伝が収められており、何れも十二真君伝に拠つて記述したことが各伝末に明かにされている。従つて本書所収の三伝は九七八年ごろの編輯であるにしても、その記述内容は既に存在した十二真君伝なる記伝に基くものであることは確実である。まず「吳真君」によれば依然として許真君との関係は出現せず、前掲晋書に見える至孝の行動と舟楫を仮らずして江を渡る奇蹟を増すのみであるが、「許真君」伝においては上清茅山道の許氏一門である許邁及び許長史（穆）が許真君の族子であるとする新たな繋縁関係、及び次の如き

真君若冠、師大洞君吳猛、伝三清要、鄉孝孝兼、拜蜀旌陽令、尋以晋室焚乱、棄官東帰、因与吳君同遊江右、会王敦作乱、真君乃假為符竹、求謁於教、蓋將欲止教之暴、以存晋室也、

新しい記述を加えているが、この許遜が吳猛を師となし、同道して江右に遊んだという記事は極めて簡略ながら両者の間に直接的な師弟関係のあつたことを示す最初の記述であり、雲笈七籤所収伝に比較して見逃し難い伝承の進展のあることが認められる。ところが、同じ第一グループに属する孝道吳許二真君伝においては吳許兩君の師弟関係に著しい変化が現れており、許真君は「乃ト勝於予章、宅在其中、名遊帷府、時共十二神君内師事吳君」の如く従来通りの師弟関係におかれながらも、例の蛟蛇征伐に出発するに際して「時吳許二君、拱揖相謂曰、吾等積德累業、所冀利民、不能為人除害、何以彰余道德矣」と記し、撰者が両者をいわば対等の関係において取扱わんとする態度のあることを伺わしめるが、更に両者が協力して蛟蛇に向う際「吳君は挺で、<sup>ヒト</sup>特<sup>ス</sup>り前む」が蛟蛇の激しい怒りに遭つてたじろぐ有様を

聞見之人、莫不懼懼、匪神仙志道之士、安能戮力而絶滅者焉、吳君当斯之時、心有忌憚、（中略）我許君名繼仙録、道心玄元、佩三万六千之神符、尚無極至真之妙法、威力自在、与奪応機、豈爾一毒而能縱暴矣、遂拽裾叱吒、挺刃而殺之、

と敘述しているのは、神仙志道の士に与えらるべき妙法の威力において、許君が吳君を遙かに凌駕するものゝあつた事を闡明しようとする撰者の意図を示すものと思われる。果せるかな中段に至つて孝道伝授の経緯を明かにし、新たに蘭公及び譚姆の二人を登場せしめて吳君に対する許君の優位を確立しており、かゝる前段の敘述展開をもつて予め設けられた伏線と見做すことが出来よう。即ち伝中の所説によれば

孝道の起源は兗州の人蘭公にあり、蘭公の「孝道之志」が神明に通じ、斗中真人孝悌王を感得して「孝道之秘法」の降示を受ける。その後、蘭公はひそかに孝悌王によつて呉中の貞母であつた誼姆の義子として託寄養育されるが、長大のち自分が孝悌王より孝道を興すべき使命を与えられていることを宣言し、居宅を黃堂觀と名付けて独立する。かくて誼姆はその許を去ることとなるが、この時呉許二君がこれを聞き黃堂觀に至り、誼姆に拝謁して「孝道之法」の伝授を請う。この際誼姆はかねて孝悌王とその兄である先王日中王が作つた銅符鉄券を二人に授けるが、この券中には

徵許氏陽、氏陽則晉時徵、為氏陽縣令、氏陽蜀郡所管、為孝道之師、伝襲孝道、誘進後代、除邪去逆、修心鍊行、則去仙道不遠、の如く、許君が「孝道之師」たるべきことの予言が明記されており、呉猛の名は全く記されていなかった。そこで呉猛は却つて許君を拜し、ついにこれを師と為すに至つた。かくて孝道の妙法を伝えられた許君はこれを十一人の真君に授け、みな孝道を崇び常に恵沢を以て人に流布した。

と記している。こゝに至つて従来呉猛を師と為す呉許二君の間の師弟關係は逆転し、許君の孝道の師たる地位が確立される訳であるが、この経緯を不必要と思われる程に複雑な人物の設定と稠密な筆致をもつて具体的に記述している本伝は、最初から許君の孝道の師としての地位を分明なものとして打ち出してくる後述の諸記伝に比較して、その撰述の時期が早いことは想像に難くなく、恐らくは呉猛を許君の師として取扱つてゐる前掲二記伝の後を承ける許真君伝承形成の初期、即ち孝道における許遜の地位と權威が確立される時期において撰述されたものと推定して誤りあるまい。ところで、本伝の撰者並びに撰述年代は不詳であるが、許真君の飛昇ののちの承宗について触れて、

二代姪男簡、承宗繼世、為道士修特供養、博受孝道、(中略)、至永淳三(元)年、奉勅再興孝道、承代伝香、姪男簡、簡男卿長、長男法強、強男靈曜、曜姪孝通、(中略)法真、真姪顯然矣、(第十三紙)

の如く、許君のゝち二十代の系譜を明かにしており、更に

從晉元康二年、真君拳家飛昇之後、至唐元和十四年、約五百六十二年、通代相承、四鄉百姓、聚会於觀、設黃籙大齋、邀請道流、と記しているが、唐の元和十四年は八一九年であり、許君飛昇の元康二年(二九二)より通算すれば五百二十七年程であり、五百六十二年とする数の理解に苦しむが、仮に五百六十二年とするならば唐の宣宗の大中年(八五四)に当る。これら二つの記事の内容が何処まで歴史的事実に基くものであるか必ずしも明かでないが、おゝむね本伝撰述の時期を暗示

するものがあるように思われる。即ち後述の如く本伝と極めて緊密な継授関係にある西山許真君八十五化録（巻中）及び「許太史」（第十八紙）は同じく孝道の沿革にふれて「永淳中、天師胡惠超、重興建之」と記し、続けて其の後一二五〇年に至るまでの沿革を掲げている（後掲）にもかゝらず、本伝が元和十四年以後のことに全く触れていないのは本伝の撰述が元和十四年を現在として捉えうる時点、即ち九世紀半頃までに行われていることを想定せしめるものがあるといえよう。敘述の混乱を避けて触れることを控えて来たが、前述の如く太平広記は「許真君・吳真君」に加えて「蘭公」伝を載せ、十二真君伝の書名を掲げてその出典を明らかにしているが、十二真君の伝を載せる許真君仙伝（第十四―十七紙）および仙苑編珠（巻下第二〇―二三紙）の列伝中には蘭公は含まれておらず、蘭公は所謂十二真君に数えられていないことが明らかである。それにも拘らず、太平広記所載の「蘭公」伝には

有至人蘭公、家族百余口、精專孝行、忽有斗中真人、下蘭公之舍、自称孝悌王、（中略）吾於上情已下、託化人間、示陳孝悌之教、後晋代嘗有真仙許遜、伝吾孝道之宗、是為衆仙之長、因付蘭公至道秘旨、於是蘭公獲斯妙訣、（中略）所伝孝道之秘法、別有宝經一帙、金丹一合、銅符鉄券、得之者唯高明大使許真君焉、

と見えており、既に許真君を衆生の長たるべしとする孝悌王の予言を載せていることは、この記述のすべてが十二真君伝に負うものである限り、十二真君伝中に本伝近似の発展せる許真君伝承が成立していたことを示唆するものであり、両伝の成立の前後関係は今のところ断定を下すべき資料に乏しいが、記述される許真君伝承の内容的な考察による限り、許遜真人伝の伝承が現存資料中最も原初的な形態であり、許真君の呉猛に対する相対的な地位の高まる十二真君伝、更に許真君の孝道における独尊的な地位が確定する孝道吳許二真君伝へと次第していることが推定出来る。而してこの孝道吳許二真君伝の成立が九世紀半頃と目されることは前述の通りである。

さて以上において辿つて来た許真君伝承の発展を更に進めているのは旌陽許真君伝である。この資料は許真君の尊号を基準とした年代判定の結果においては第一グループに位置づけられたけれども、これには大きな疑問がある。本伝を収録する修真十書玉隆集の撰者である白玉蟾は消搖墟經（巻二第三六紙）によれば、武夷山の道士であり、宋の嘉定（一二〇八―一二四）中に寧宗の詔徴を受けて宮中に赴いたことが記されているのみならず、記伝の内容から見ても本伝に至つて忠孝の

道德を説く八宝垂訓その他の後述の如き新教説が増加されているほか、全般的に記述内容が豊富になつてゐる事実は本伝が敘上の三記伝より遅れて成立したことを明らかに示すもので、素直に白玉蟾の活躍せる南宋末、即ち十三世紀初期の撰述と見るのが穩当と思われる。かつて孝道吳許二真君伝が許吳二君の師弟關係の逆転を決定づけた銅符鉄券授与の記事に續けて、本伝が

(謹姆) 願謂吳君曰、君昔以神方許君之師、今孝道明王之法、独許君得伝、君當返師之也。(中略) 自今宜以許君為長也、

と述べてゐることは「無猛名字、猛乃却拝許君為師」の如く師弟關係の逆転を單に吳猛の自発的行動の描写によつて表している孝道吳許二真君伝の記述を更に一步進めたものであり、本伝が吳猛に対する許真君の決定的な優位を最終的に確定することを意図したものと受取ることが出来ようし、太平広記の「許真君」伝においてその族子とされた許邁及び許長史(穆)が本伝において「皆真君再從昆弟也」と却つて両者の關係が具体化されているのも恐らく同様な意図に出る加上説の一種と見なすべきものであらう。歴世真仙体道通鑑所収の「許太史」は邁穆兩人を再從昆弟としている点では旌陽許真君伝を除く唯一の資料であり、両伝の成立における密接な継授關係の存在を予測せしめるものがあるが、前者の「真君許氏、名遜字敬之」に始まる冒頭の書き出しを本伝が「太史真君、姓許氏名遜字敬之」と改めているほか、記伝の内容はほぼ完全に一致しており、僅に本伝が末尾三紙に亘る太史飛昇後の許真君信仰の沿革に関する記事を増しているに過ぎず、本伝は旌陽許真君伝の増益本と称すべき性格をもつてゐる。道藏源流考は歴世真仙体道通鑑の撰者である趙道一を南宋の道士と推定し、正編五十三巻の内容がおゝむね両宋までの記事である点を指摘しているのは従うべき意見であり、恐らく趙道一が通鑑の編輯に當つて玉隆集所収の旌陽許真君伝に若干の筆を加え、書名を改めて収録したもので、本伝の末尾を「真君昭靈著顯、非一襲、承恩寵事迹、詳載逍遙山玉隆万寿宮志」と結んでいるのもこの点を暗示するものがあらう。

ところで、この様な繋絡の關係は更に西山許真君八十五化錄まで伸びており、西山勇悟真人施岑の跋によれば、本伝は「許真君の伝を八十五の事跡に従つて章句を分別し、各化ごとに一編の詩を附したものである」とあり、所謂比事屬辭の形式による独特な体裁を有してゐるが、その第一本始化より第五十崇祀化までは旌陽許真君伝を殆どそのまま分別したものであつて、第五十一の国封化は先に指摘せるところの旌陽許真君伝に対する「許太史」の増益部分と全く一致してゐる。従つて



本伝の前半三分の二は「許太史」に基いて撰述されている事は断定して差支えない。続く第五十二政和化より最後の第八十五胡師化迄の二十四化は現存資料中に校合に値する藍本を見出しえないが、その内容は政和化より第六十八紫庭化までが宋金時代における許真君の信仰・靈驗に関する記述であり、第六十九神烈化より第七十九の冲道化までが許真君を除く十一人の真君の伝、続く冲道化以下は蘭公はじめ、許真君の在世中に交渉のあつた人物の伝を載せる部分であり、施岑の跋に挙げる西山伝記・十二真君伝などがその主な材料となつているものと想像される。序文や跋文に具体的に記される本伝の撰述・刊行の経緯については後に触れるような矛盾もあり、そのまゝ信じ難いが、その成立年代はほぼ推定できるようで、冒頭に掲げる施岑の序は「巨宋丙午」即ち淳祐七年（一二四七）、卷末の同じ施岑の再識は淳祐十年（一二五〇）七月十五日、更に続く孫元明の後記は淳祐七年（一二四七）七月十七日の日附であり、遅くとも序の認められる一二四七年までには完成していると判断して誤りあるまい。たゞ本伝の編者が十二真君の一人である西山勇悟真人施岑であり、跋・序・再識が共に同人の手になることは兎角、伝中（下巻）に本人の伝である勇悟化を収めていることは少々奇妙に思われるが、跋によれば嘉定十七年（一二三四）祖師許真君が金陵に下つて「忠孝之教」を陳べ、施岑がその師旨を奉じた折に邢道堅・梁道寧二人の弟子に遇つて勇悟道院を建立したと記しており、こゝに在つて施岑が本伝を撰する際に「執巻待旨、始終如一」であつたと云われ、また「募金鏤梓」したといわれる邢道堅が事実上の撰者であり、これを勇悟真人施岑に仮託したものと見る事が出来よう。

次に十四世紀以降の成立と推定される第三グループについて検討を進めるが、これまで専ら拡大・増益の一端を辿つてきた許真君伝承はこゝに至つて始めて縮少・節略の方向にむかうことゝなつており、伝承演變の過程に画期的な変化の起つて注意される。まず許真君仙伝は既に考察し終つた旌陽許真君伝・許太史・西山許真君八十五化録の所謂三本に共通する部分、即ち許真君の出生より飛昇までの記述と殆んど同じ脈絡を辿りながら、これに若干の筆刪を施したものであり、最後に十一真君の伝を掲げる体裁の上からいへば、三本中とくに西山許真君八十五化録に最も縁親な関係にあるが、敘述の精粗において本伝の記述が著しく簡略である。この様に本伝の全編に亘つて認められる節略の手法の跡は本伝のもつ大きな特色となつており、その具体的事例の検討を通じて、自から本伝のもつ内容的な特徴が表明されるであらう。

う。例えば敍上の三本は許真君が飛昇の際に垂れた教化の模様を記す一節の中で共に

又与十一弟子各五言二韻、勸誠詩十首、以遺世、及以大功如意丹法伝衆（家）、弟子之不与上昇者、此方即丁義神方一也、其訣必挾日齋戒設位、醮十八種桑之神、然後書符逐味誦而修合之、其治衆疾、如意而愈、

と伝えているが、本伝は右の傍点を附した部分を改め、第十二・三紙において

勸誠詩、即今一百二十靈籤也、如意丹方亦行于世、每歲尚有黃中齋會、

と置換えており、かつて許遜が「聞西安吳猛、得至人丁義神方、乃往師之、悉伝其秘」（許太史第一紙）と伝えられ、許遜と吳猛をつなぐ唯一の絆とされていた丁義の神方伝授の記述を削除し、且つ勸誠詩及び如意丹方に関する新しい名称及び儀礼の簡単な説明に換えていることは、従来発展し続けてきた許真君伝承が脱皮の時期に入つたことを窺わしめるものであり、本伝が始めて元代の晋封にかゝる至道玄応の尊号を用いていることと共に、許真君信仰の進展と変化に適應する新たな許真君の記伝を作らんとする本伝撰述の目的と姿勢を窺わしめるものがあるといえよう。なお許太史図伝は本伝を藍本としていることが明瞭であり、その内容は本伝の記述を五十一章に分け、各章ごとに一点の挿絵を加えた体裁上の相違を持つに過ぎないと云える。勿論その間には若干の相違がない訳ではなく機械的な分章によつて生ずる文脈の欠落を補足する類の表現上の操作のほか、二章約十行程の増補が見出される。併しこれらは何れも所謂三本に共通する記述を、そのまま依用したものであることは明瞭であり、許太史図伝は許真君仙伝を藍本として分章切句する過程において、かつて許真君仙伝が所謂三本に対して加えた削除を二箇所に亘つて復元したと説明することも出来よう。何れにせよ許真君仙伝と許太史図伝との間には極めて緊密な継授関係が認められる。

さて敍上に演變の跡を通覧してきた許真君伝承に事実上最終的な帰結をもたらしたのは浄明道の根本聖典である浄明忠孝全書所収の浄明道師旌陽許真君伝である。この伝の撰者である黄元吉は元の道士であり、浄明忠孝全書の序文によれば「許真君の浄明道を継いだ玉真劉先生が西山に隠れた際にこの伝を得、その弟子の黄元吉が自から聞くところの、平生の語を集めて書となし、これを刻印したものであり、二十年後の至治三年（二三三）に至つて曾巽申が本伝を觀るを獲た」と記しているところから推せば本伝の刊行は一三〇三年頃であつたと思われる。本伝の内容は所謂三本の系統を引いてお

り、便宜上西山許真君八十五化録に拠つて両者の主な相違点を比較すれば、本伝は同録の仙昆化・帰隱化を削除し、黃堂・玉譜・朝眞の三化を纏めて後掲の如き六行に整理する改変を行つてゐるほか、全般的に細部に亘る部分的な削除を加えており、例えば丹詔化（卷中第八紙）の

至孝武帝寧康二年甲戌、真君年一百三十六歲、八月朔旦有雲仗自天而下、二仙（栗鑿導從甚盛都）降（于真君之）庭（真君降階迎拜二仙曰奉）玉皇（命賜子詔真君俯伏以聽乃宣）詔曰、上詔學仙童子許遜卿、在多劫之前、積修至德、勤苦悉備、

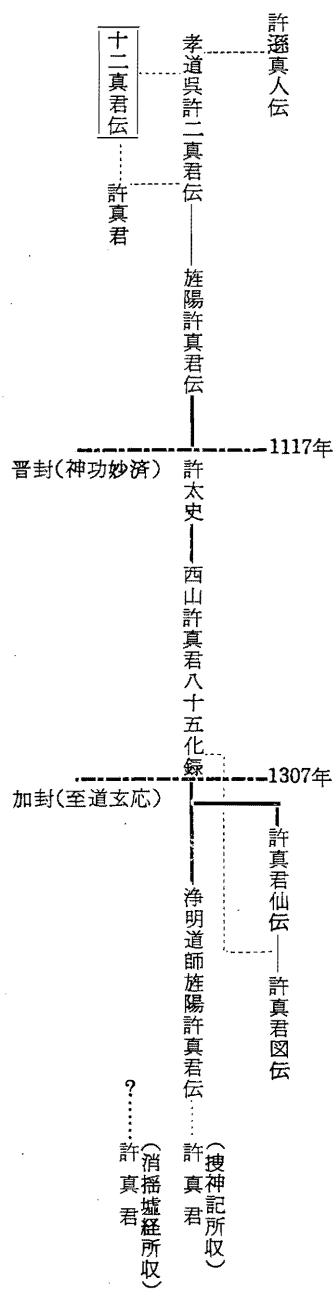
について、括弧内の文字を削除しながら、藍本の文章の脈絡を少しも変えない誠に巧妙な節略の手法を用いて本伝を構成し、最後に恐らく撰者黃元吉の新たな伝聞になると思われる許真君の靈迹において起つた靈異の事実と、至道玄応の尊号加封に関する七行の記事を補足している。ところで、さきに指摘した六行とは

（真君）乃於丹陽鼎黃堂、請問道於諶母、母以所受孝道明王之法、併蘭公所付孝悌王銅符鉄券、金丹宝經授之、且謂吳君曰、君昔以神方為許君之師、今孝道明王之道、独許君得伝、君当返師之、（第二・三紙）

この内容は既に注意してきた孝道の祖師としての許真君の地位と權威を確立する為に、時と共に増飾された蘭公及び諶母を介する孝道伝授の複雑な経緯を簡略に整理したものであり、祖師許真君に対する社会的崇尊が不動のものとなつた段階において、既に重要性を失つた煩雑な神話的潤色の跡を払拭したものと見ることも出来るように、仙昆化即ち許邁・許穆を許真君の族子或は再従昆弟とする所説の削除も、かつて許真君の權威を高めるべく茅山道との繋縁を誇示せんとした仮託の跡が淨明道教団の確立後において最早その權威を疑わしめることこそあれ、何等の利益を齎すものでもなくなつたことに基くものと推測出来るように思われる。さて最後の消搖墟經（卷二）及び搜神記（卷二）に収められる同名の「許真君」は前者が五紙、後者は僅か三紙に過ぎない短篇であり、何れも極めて一般的な許真君伝の要約本と云うべき性質をもつ資料である。従つて形式的にも内容的にも特別な特徴は見当らず、従つてまた成立年代も藍本の系統も不詳である。たゞ本伝を収録する消搖墟經は、最後に掲げる張三丰が明の洪武（一三六八—一三八八）年間の初に大和山に入り、その後二十三年にして世を去ると記しておることから、その撰述は一三九〇年以前に溯らないことは明白であり、おゝむね十五世紀ごろと考へて大過あるまい。また搜神記は序によれば万曆二十一年（一五九二）に三山富春堂において搜出されたものと云われて

おり、同記所収の最後の且つ紀年の明かな記事が永樂十七年（一四一九）の蕭公の孫、天任の立祀に関する記述であること  
から推せば、この搜神記の編輯されたのは十五世紀の初期から十六世紀の末期の間と見てよく、両「許真君」が前掲許真  
君伝関係資料中の最も新しいものであるという見当だけはつけられよう。

敘上に検討してきた諸記伝資料の繫絡関係及び成立年代の概要を突き合せるならば、各記伝相互の間に次の如き関係の  
あることが指摘出来よう。



(備考) 卦線の細太は繫絡関係の疎密を示す

### 許真君信仰の発展と浄明道の成立

許遜伝承の基本文献に対する資料的な吟味に深入りして、既に許遜信仰の発展に関する歴史的な考察に割きうる紙数の  
余裕が乏しくなった憾みがあるが、最後に以上において行なってきた検討の結果を基礎として、浄明道の成立に至る許遜  
信仰発展の沿革を辿り、小論を結んでおくことゝしたい。許真君を祖師とする信仰の歴史的な発展過程は許遜伝承の演変

を中心とする資料の成立史的な角度から、或は信仰集団の変遷を主とする教団史的な視野から、更には教説の進展を追求する教理史的な観点から見ることによつて若干異なつた区分を試みることが可能であろうが、総合的な見地からこれを跡づけるならば許遜信仰の發展過程はおゝむね四期に分けることが出来る。さて許遜なる人物は呉の赤烏二年（二三九）に出生し、晋の寧康二年（三七二）に飛昇したとする伝承において、多くの記伝が略一致した記述を載せているけれども、前掲資料以外に許遜の実在を証拠立てる確実な資料はなく、これを架空の人物、少くともその伝承の内容を虚構と見ることに異論があるまい。既に考察した如く、当面の問題である許遜伝承の発生を探るべき資料は、現存の記伝では一〇一九年撰の雲笈七籤所収の許遜真人伝が確実に溯りうる最古の資料であり、更に太平広記所引の十二真君伝が九八一年以前に存在していたことを想定することが出来る。併しこれは記伝成立の確実な後限を示すものに過ぎず、許遜に対する信仰・伝承の発生の時点が更にこれを溯ることは云う迄もない。許遜伝承の初期における最も纏つた資料である孝道吳許二真君伝は、この点を窺うべき許遜祭祀の歴史的な沿革にふれ

至元康二年八月十五日、合宅飛昇、鵝犬悉去、旧宅壇井儼然而存、承二代姪男簡、承宗繼世為道士、修持供養、博受老道、晋永和三年、勅再為宣觀、至貞觀元年、国之不崇、人之碩索、觀宇寥落、有似寂寞焉、至永淳三（元）<sup>⑩</sup>年、奉勅再興孝道、承代伝香、姪男簡、簡男卿長、長男法、（中略）仙姪法真、真姪顯然矣、（第十三紙）

と記して、二代簡以下二十代の相承系譜を明らかにしており、更にその後の許遜信仰について

從晋元康二年、真君奉家飛昇之後、至唐元和十四年、約五百六十二年、通代相承、四郷百姓聚会於觀、設黃錄大齋、邀請道流、三日三夜、昇壇進表、上達玄元、作礼焚香、克意誠請存亡獲福、方休暇焉、（第九紙）

每至正月五月八月並以十五日、朝礼建齋、誦讀行道、為国王大臣人民、消災祈福、至今相承不絶、（第十三紙）

と記しており、また歴世真仙体道通鑑（卷二六）所収の許太史（第十八紙）には

隋煬帝時、焚修中輟觀亦尋廢、至唐高宗永淳中、天師胡惠超重興建之、

とも伝えている。この孝道吳許二真君伝の記す具体的な信仰・祭祀の記述は、既に推定したように九世紀半頃の模様を物語るものと見てよく、簡以下二十代の系譜は許遜の飛昇以来、この時代に至るまでの神仙許遜の靈異に対する血脈的な祠

廟信仰の相承を示したものと受取られる。この系譜が何処まで歴史的事実として溯りうるかはさておき、神仙許遜に対する祭祀の伝統がこの時代に引継がれて存在したことは想定して誤りあるまい。晋の永和三年(三四七)、隋の煬帝、貞觀元年(六二七)の断片的な祭祀の記述、就中晋代のそれは余りにも記伝の撰述年代と隔つており、その真偽には少なからぬ危懼が残るが、恐らくその間の沿革を点綴すべき顯著な出来事として挿入されたものであろう。併し兩記伝が一致して伝える永淳(六八二)中における孝道再興の記事は推定される孝道吳許二真君伝の撰述年代に比較的接近した年代の記事であり、且つこゝに記される胡惠超は西山許真君八十五化録(下卷)胡師化においても高宗ころの人として伝えられ、後述の如く淨明道關係資料の具体的紀年を表す歴史的な記述の多くがこの人物の事蹟と結びついていることからその存在は信頼してよい。六朝末期から唐の中期にかけて中国の宗教界の内部に儒教的な孝道の倫理を教説化せんとする顯著な動向が認められることは既に論じた如くであり、「再建」と云い「重興」と云うこの永淳中の記事は許遜の祠廟を中心として伝承された単純な神仙信仰が、前述の如き孝子吳猛を介する孝道譚を加えて増飾され、倫理的な性格を備える新たな教説として再編成された事を暗示するものゝようで、胡惠超こそ其の推進者であつたのでなからうかと推測される。許遜信仰の第一次形態というべき神仙許遜に対する祠廟信仰が所謂「孝道之妙法」を包摂することによつて儒教的社會における存立の権利を確保し、第二次形態へと發展してゆく劃期を高宗の永淳元年(六八二)と見ておきたい。

ところで、この時期——孝道期——における許遜信仰の新しい教説の構造上の特徴は蛟蛇征伐に具象される「振乏蠲痾、窮妖蝕毒」の靈異譚と孝道譚との結合に求められるが、一見異質と見られる両者は、例えば孝道吳許二真君伝(第一・二紙)に

吳許二君相謂曰、吾等積德累業、所冀利民、不能為人除害、何以彰余道德矣、(中略)匪神仙志道之士、安能戮力而絶滅者焉。

の對話に如実に示されるように、濟世利民の實踐と靈能の獲得を孝道修行の目的、及び必然的な結果とすることによつて美事に結びつけられており、抱朴子以来神仙思想の底流に認められる倫理的な傾斜、即ち道德的修練を神仙たる為の必須条件となし、神仙となることによつて超人的靈能を獲得すると云う思想の具体的な結晶をこゝに見い出しうる。これが即ち「孝道之秘法」、「孝道明王之法」であり、許遜信仰はこれによつて所謂淫祠より祀典への脱皮を遂げ、許太史(第十八

紙)に續けて

明皇尤加寅奉、宋太宗真宗仁宗皆賜御書、真宗又遣中使、賜香燭花幡旛節舞偶、改賜額曰玉隆、取度人經太釈玉隆騰勝天之義、仍禁名山樵採、調租賦之役、復置官提舉、為優異老臣之地、

と記されるまで宋朝の歴代帝王の崇奉を受けるに至る。ところが斯様な信仰は宋末に於いて急激に深まっており、既に敍した如く政和二年(一一二二)五月十七日徽宗は自から玉冊を降して「神功妙濟」の尊号を奉り、道士三十七人に請い、洪州の玉隆觀に道場を建て、七晝夜の設醮を行なわしめている。而してこの際に奉られている玉冊文(許太史第十八、二十紙)には、例えば

廟像屹崇、風烈如在矧、炎暉之有赫、方皇運之邳隆、荐降嘉祥、聿彰幽贊、豐答民物阜寧、(中略)佑我無疆、保茲景命俾緝、熙於純嘏、用敷錫於群倫、

と述べ、徽宗自から「臣某(御名)誠惶誠恐、頓首謹言」の謙辞を用いてひたすら許真君の加護を求め、黎民之福・皇運之邳隆・佑我無疆ならんことを祈願しているのを見る。徽宗をしてかくまで許真君信仰に傾倒せしめ、許真君を國家の祭神として尊崇せしめるに至つた背景に、國家の内外に深刻な憂患をはらむ北宋朝末期の政治的危機が横たわつてゐることは上掲の玉冊文からも充分窺いうところであるが、道人王仔昔の勸奨が徽宗を動かす直接の契機となつたと見てよいので、宋史(卷四六二)の伝に

王仔昔、洪州人、始學儒、自言遇許遜得大洞隱書、豁落七元之法、出游嵩山、能道人未來事、政和中、徽宗召見、賜号冲隱処士、帝以旱禱雨、(中略)進封通妙先生、居上清宝箓宮、獻議九鼎神器不可藏於外、乃於禁中建円象徽調閣以貯之、(中略)又欲羣道士皆宗己、及林靈素有寵、忌之陷以事、囚之東太一宮、旋坐言語不遜、下獄死、

と記しているように、彼が許遜の靈異信仰を説いて徽宗に接近し、その信頼をえている事からも、徽宗の許真君に対する熱烈な信仰と國家的な祭祀が、皇帝権力に密着して道教界に勢力を扶植し、遂に林靈素の忌避を被つてゐる彼の策動によつて助長せしめられたことは想像に難くないところであらう。斯様に宮廷に進出して皇帝の個人的な信仰を集め、更に進んで政治権力の尊依を受けるに及んで許遜信仰は再び変質し、所謂「孝道之法」は忠の道德を加えた「忠孝之道」として

新たな発展を遂げ、許遜信仰の第三次形態——忠孝道期——へ移行することとなる。ところで許遜記伝資料の中で最も早期に忠孝の道徳を説いているのは旌陽許真君伝（第十四紙）であり、許遜信仰における最初の律法と云うべき所謂八宝垂訓について

（許真君）日与弟子講究真詮、数十年間、不復以時事閑意、惟精修至道、作醉思仙之歌、及著八宝垂訓曰、忠孝廉謹、寬裕容忍、忠則不欺、孝則不悖、廉而罔貪、謹而勿失、修身如此可以成德、寬則衆、裕然有余、容而品受、忍則安舒、接人以礼、怨咎滌除、

と説き、忠孝の徳目を修身道徳である忠孝廉謹と対人道徳である寬裕容忍の徳目の冒頭に掲げて、忠孝重視の態度を明らかにしていることは本伝の成立する十三世紀初期ごろ、すでに忠孝道への進展が教理的にも確立されていたことを物語るものである。併しながら、この八宝垂訓における忠の觀念は所謂君臣道徳としての忠道を意味するものでないことは注意すべきであつて、八宝垂訓が続いて「忠則不欺、孝則不悖」と釈していることによつて明らかのように、忠とは単に誠に於て欺かざる忠允の意味であることが知られる。しかし恰も遼金の相次ぐ侵入を被つて民族的自覺が高まり、独裁君主体制下にあつて国家に対する忠義の道徳が強調される南宋末期にあつて、かゝる忠に対する教理的解釈が唯一のものとして通行したとは考え難いが、果して同じく白玉蟾の撰である修真十書雜著指玄篇（第十一紙）に載せる修真十戒は、その第九戒に

九者、不得不忠不孝不仁不信、当尽節君師、推誠万物、

と説いて消極的ながら忠孝の実践を課し、君主師匠に対する節操を守るべきことを教示しており、少くとも對世俗的な教化において、君主に対する忠誠を意味する忠の道徳をも含めて説いていたことを窺しめるものがある。ところが、十四世紀以降に成立した靈宝淨明院行遣式（第十二紙）に収める上清靈宝十戒においては、その冒頭に「一、執心平等、不得自欺。二、忠事君師、孝敬天地父母」と説いており、かつて八宝垂訓において「忠則不欺」と説かれた「不欺」の徳義と分離された忠の道徳、即ち君臣間の道徳としての忠義が第二条に独立して掲げられていることは淨明道教団において説かれる忠の觀念の内容を窺わしめるものであり、これが許遜信仰の最終的な形態——淨明忠孝道——における重要な教理的特色となつてゐることを指摘しておきたい。



さて浄明道の教理的な考察は本稿の目的とするところではないが、試みに理解しうる浄明忠孝全書の所説を纏めるならば、「浄明とは無形の大道」であり「君親の恩に答える」「忠孝は大道の本」である。故に浄明と忠孝の大道は「同理同源」であり、忠孝の大道を「正心誠意」「真実践履」することによつて忠孝の「本立ち、仙成」り、「是に由りて忠孝立ちて心性を得」「直ちに浄明に至る」ことが出来る。「浄とは物に染らず、明とは物に触れざる」ことであり、「不染不触」にして、ひたすら忠孝を実践することによつて仙道を成就し、心性を獲得すること。これが即ち浄明忠孝の窮極の悟道であると解せらる、斯くの如き教説を伝える浄明道の道統の系譜を、同じく浄明忠孝全書（巻二）の諸師の伝によつて整理すれば、その道統は



となつており、まず許真君が日月帝君より浄明靈宝忠孝道の伝授をうけてのち、唐代在世の洪崖及び洞真も直接に日月帝君より同道の伝授をうけている。次いで玉真劉が法師洞真を介して許真君より道統を授けられ、中黄より丹陽へと相承されたことが窺われる。ところで洪崖の伝は本書（巻一）洪崖先生伝以外に参看すべき資料がなく、この人物の実在には疑問がある。相承直系に連らならない洪崖は、恐らく東晋の著名な占筮家として種々の占驗を伝えられる郭璞が王敦の謀反に際して忠孝の大義を説いた事跡によつて監度師に擬せられていると同様、これを道師許真君、法師洞真と列べて経師に当て、道・經・法三師の形式を整えるべく配置された仮託の人物と見てよいのではあるまいか。これに対して法師洞真是胡惠超のことであつて、彼が許遜信仰に孝道を結びつけて所謂祀典への脱皮を実現した有能な道士と目されることは既に述べたところであり、この事を伝える「許太史」伝、及び彼の最初の記伝である西山許真君八十五化録（巻下）胡師化が共に浄明道との関連について何等触れるところがないにも拘らず、浄明忠孝全書（巻一）の洞真先生伝に至つて初めて「嘗遇日月二君、授以浄明靈宝忠孝之道」と記されているのは、これまた仮託であることを物語るものであり、浄明道の

道統に記される經・法・監度の三師の伝は、何れも淨明道の成立後に捏造或は潤色された架空の所伝であると断定して差支えなからう。

淨明忠孝全書（卷一）の玉真劉先生伝によれば、法師洞真に続く淨明道伝授の経緯について「建炎二年（一一二八）の兵禍の際、民苦の救度を祈つた何真公の禱請に應じて、紹興元年（一一三一）許真君が玉隆宮に降り、飛仙度人經及び淨明忠孝大法を授ける。これを得た何真公は翼真壇を建て、弟子五百人を度し、民衆を安堵するも二百余年にして其の法は衰微した。至元十九年（一二八二）に至つて玉真劉が西山において法師胡洞真に遇い、まさに淨明大教の興るべき時に當つており、玉真劉こそ師となるべきである旨の讖言を受ける。果して一二九六年これを実証する許真君の下降をうけ、更に翌年再び降つた胡洞真より許真君の伝える淨明之旨の伝授をうける」これが彼の悟道を意味すると見てよいであらうが、その後の玉真劉の行跡について、彼の伝は次の様な注意すべき記述を加えている。

先生自是益加精進、又於孝行里立騰勝道院、以善道勸化、遠近聞知仰嚮、從游者衆、（第二〇紙）

これよりのち淨明道は弟子中黄先生黄元吉（一二七〇—一三二五）に伝えられ、更に丹陽道人徐異（一二一九—一三五二）に伝えられる。ところで何真公の事蹟は玉真劉伝に至つて初めて現れるもので拠るところが不明であり、そのまゝ信じ難いものがあるが、若しこれが何等かの歴史事実に基づくものであるとすれば、彼の一一三一年の得道より二百年の期間は恰も前述の所謂忠孝道期には々相当しており、さきにふれた「迨今二百余年其法寢微」の記述は淨明道の母胎である忠孝道期許遜信仰の淨明道成立直前における衰微状態を暗示するものと受取る事も出来よう。何れにせよ淨明道の事実上の開祖は玉真劉（一二五七—一三一〇）を置いて他に求めることは不可能であつて、彼の得道をかける一二九七年即ち元の大徳元年こそ淨明道発祥の年代であり、其の後における彼の道院の建立と民衆の教化が淨明道教団の成立を物語るものと見なしてよいであらうし、元の成宗年間（一二九五—一三〇七）における至道玄応の加封も淨明道教団の発足に際して行われたものと想定することが出来るであらう。

① 道蔵 正乙部 九八八冊。

② 管見ながら、これまで若干淨明道に言及された論考には酒井忠夫博士「中国善書の研究」—第五章功過格の研究—（三七二—三

頁)、及び吉岡義豊博士「初期の功過格について」(東洋文化研究所紀要第二十七冊)がある。なお、これらの見解については註⑳を参照されたい。

③ その代表的なものに「許仙鉄樹記」があることは人のよく知るところであらう。これについては小野四平氏の「内閣文庫本許仙鉄樹記について」(昭和四十年五月、第十四回東北中国学会発表)がある。

④ 二十四孝については道端良秀博士「唐代仏教の研究」(二九六頁)参照。

⑤ 孝道與許二真君伝引用の中略部分の系譜は「通男叔嗣息、嗣息法胤、胤姪法恭、恭姪景陽、陽男顯龍、龍男承親、親男道超、超男元松、叔男玄基、基男紹珪、珪男文芝、芝男王仙」と相承されている。

⑥ 仙苑編珠(巻下 第二〇―二二紙)によれば十二真君とは許遜・時荷・吳猛・甘戰・周広・陳勲・魯(曾)・享・肝烈・施峯(今)・彭抗・黃輔・鍾嘉の十二人である。このほか、許真君仙伝(第十四―十七紙)・西山許真君八十五化録(巻下第一―一〇紙)にも十二真君の略伝のあることは本文に触れたところである。

⑦ 陳国符氏「道藏源流考」(二四三頁)参照。

⑧ 旌陽許真君伝第十五紙、許太史第十五紙、西山許真君八十五化録巻中第九紙。

⑨ 許太史図伝 巻上第十四紙、巻下第八紙。

⑩ 旌陽許真君伝第三紙、許太史第三・十一紙、西山許真君八十五化録巻上第七・二十三紙。

⑪ 唐の高宗の元号である永淳は元年のみであり、三年は元年の誤写と推定してよいであらう。

⑫ 近刊予定の拙稿「道教と仏教の父母恩重経」(宗教研究 第一八七号)を参照されたい。

⑬ 抱朴子内篇(巻六微旨篇)「然覽諸道戒無不云、欲求長生者、必欲積善立功、慈心於物、恕己及人、仁逮昆虫、(中略)如此乃為有德、受福于天、所作必成、求仙可冀也」。

⑭ 「孝道明王之法」の名称は旌陽許真君伝(第四紙)に初めて検出されるものであるが、これが太平広記(巻十五)所収の「蘭公」伝に記す「(蘭公)精專孝行、感動乾坤、忽有斗中真人、下蘭公之舍、自称孝悌王、云居日中為仙王、月中為明王、斗中為孝悌王、夫孝至於天、日月為之明、孝至於地、万物為之生、孝至於民、王道為之成」の説話に基づくことは明らかであり、従つて「蘭公」伝の拠る所謂十二真君伝に基づくことも出来ようし、更に遡るならば孝経(孝治章 第八)に「子曰、昔者明王之以孝

治天下也、(中略)是以天下和平、災害不生、禍乱不作、故明王之以孝治天下也」という所説に依拠して捏造された話説であると推定することも可能であり、浄明道の母胎をなす許遜信仰と儒教々説の最初の結びつきを窺いうるものがある。

⑮ 宋史(卷二十)徽宗本紀に「政和元年、春正月己巳、以賢妃王氏為妃、壬申毀京師淫祠一千三十八区」と伝え淫祠毀却の記述はあたかも徽宗が許真君に対する國家的な祭祀を行い、神功妙済の尊号を奉る前年の事件であり、許真君信仰の所謂淫祠より典祀の進展をより鮮明に浮びあがらしめるものがあり、注意すべき記事である。

⑯ 道藏 洞真部方法類 一二二冊。

⑰ 道藏 洞玄部 表奏類 三四〇冊。本書の中には至道玄応の尊号が使用されており、元の武宗の至大元年(一三〇八)以前に遡るものでないことは明らかであるといえる。

⑱ 浄明忠孝全書(卷二)浄明大道説、及び同書(卷三)王真先生語録内集による。

⑲ 晋書(卷四二)王敦伝。

⑳ 浄明道の成立について一応の見通がついたので、こゝで註②に掲げた二論考を紹介し、本論の不足を加えておきたい。まず酒井博士は前掲書の中で浄明道と金の太定十一年西山会真堂無憂軒又玄子の撰と伝えられる道藏本(第七八冊)太微仙君功過格との関係にふれて「許遜君仙道教団には有名な浄明忠孝道があるが、この太微仙君功過格には孝はあつても忠孝は説いてないから浄明忠孝道とは関係なく、江西の西山系の教団ではなく華北の西山のある道教々団で作製され行われたものかも知れない。符法のことが入っているから全真の初期の教団で作られたものでもない」と述べ、両者の関係を否定的に見ておられるが、浄明忠孝道の成立は本論に明らかにした如く十三世紀の末であるとする卑見をもつてすれば、浄明忠孝道と一一七一年製作の太微仙君功過格との間に少なくとも直接的な繋がり求め難いことは当然のことでもあり、その見通しは正しいものとして承認されてよいであろう。たゞ西山を、浄明道の母胎をなす許遜君信仰の靈迹である江南の西山に比定することは、何等躊躇の要のない明白な事柄と考えられる。

一方、吉岡博士は前掲論文の中で、酒井説に対する批判的な立場から浄明道の起源にふれて「古いところはしばらく措いても、唐末にはたしかに浄明教と称する道教の一派が存在した。この派に関する著作で古いところでは、五代の施肩吾撰と云う西山群仙会真記五巻があるし、太平広記卷十五の蘭公伝では蘭公が浄明道を伝授せられたことが説かれている」云々と述べておられるが、卑見によれば浄明道の成立は十三世紀末であり、蘭公が孝悌王より伝授されているのは本論に引いた如く「孝道之宗」である。従

つて浄明忠孝道の成立を唐末以前に遡らしめる立場から太微仙君功過格に見える「為国」云云の思想を以て、忠の教説に擬定し、該功過格と浄明忠孝道との直接的な繋連の存在を推定する一資料とされることには若干の疑問がある。しかし博士が「南宋初の新道教が浄明道の伝統——これを浄明道の母胎である孝道期・忠孝道期の許遜君信仰と解すれば、恐らく吉岡博士の真意もここにありものと憶測されるが——から興起した」点を指摘しておられる点は敬服すべき卓見であるといえよう。

ちなみに、浄明忠孝全書には浄明教と全真教及び正一教との関係を考えるうえに注目すべき若干の資料がある。まず中黄先生碑銘（巻一第二六紙）には

明年（一二二七）太定改元、嗣漢三十九代張天子、朝京廷臣、薦希文（黄元吉）者曰、中黄先生、剛介堅鷲、長於幹裁、撫嘗都監其宮、治衆嚴甚、人或不樂、而土田之入、廬舍之完、公而成功、（下略）

と伝えているが、この張天子とは元史（巻二〇二）「积老伝によれば延祐三年に天師となつた張嗣成である。また丹扃道人事实（巻一第二八紙）には

至治三年（一二三三）、又參藍真人于長春宮、得全真無為之旨、賜号浄明配道格神昭効法師、

と見えている。この藍道人とは陳垣氏が南宋初河北新道教考（七二—八頁）に明らかにしているように全真教第十四代の掌教である藍道元である。元史（巻二八）英宗本紀によれば

至治二年（一二三二）十二月戊辰、以掌道教張嗣成、吳全節、藍道元、各三制命銀印、敕奪其二、

とあり、当時、張嗣成・藍道元が吳全節とともに道教界の代表的な人物であつたことを示しているが、浄明道の道統をつぐ黄元吉、徐異の二人が、浄明道の形成期において、これら正一・全真両教の中心人物と交渉があり、特に徐異と藍道元との間の師弟關係の存在は全真教と浄明道との關係を窺ううえに極めて重要な資料となろう。仔細は後考にまきたい。

昭和四十一年四月七日 稿了

## 追記

註③に紹介した小野四平氏の発表は本号に掲載される予定と聞く。併せて参考されんことを望んでおく。四月八日 記